

花岡平和記念館

坪井主税

戦時中の悲惨な歴史的出来事の当事者である加害者と被害者の和解は難しい。そしてその出来事のアとの同じ時代に生きる加害者と被害者の未裔の和解も容易ではない。だが、できないことはない。そうした和解の第一歩は、両者がその歴史的出来事の実を認識しあうことである。そして、さらに勇気ある第二歩は、加害者とその未裔が加害の実を認め、後世に伝える努力を具体的な形にすることである。それは、被害者とその未裔が受忍できる和解への前奏曲になりうる。

六五年前、戦争がもうすぐ終わろうとしている一九四五年六月三〇日の夜、秋田県北秋田郡花岡町という小さな町（現在は大館市花岡）で、「事件」が起こった。中国から強制連行されていた労働者八〇〇人以上が、過酷な労働と虐待に耐えかねて、花岡鋳業所（現在の同和鋳業）の土木部門を請け負っていた鹿島組（現在の鹿島建設）の寮から集団脱走、山に逃げ込んだ。町の人と警官と憲兵は山狩りをして、彼らを捕らえ、町の集会所の前庭に集め、後ろ手に縛って、三日三晩食事も水も与えず、殴り蹴った。教師たちは生徒に、

「チャンコロ」に唾を吐けと命じ、これで叩けと棒を配った。集会所の中では、両手の親指だけ縛って天井から吊り下げ、ムチ打った。約一〇〇人の中国人強制連行労働者の命が奪われた。

戦争が終わって、この事件は「花岡事件」と呼ばれるようになった。虐待をした町の人と警官と憲兵にとっては、「過去に犯した恥ずべき行為」。かといって、いまさら公然と事実はいやべれない。だが、虐待され殺された中国人本人や遺族にとっては、忘れようにも忘れられない「日本人の蛮行」。何が何でも表に出したい。一九八九年、中国人生存者と遺族は「花岡被害者連絡会」を結成、鹿島建設に対して訴訟を起こし、公式謝罪と補償、そして、花岡において引き起こされた行為の事実を伝える建造物の建設を求めた。紆余曲折あつて、一九九〇年、鹿島建設はようやく公式謝罪し、二〇〇〇年には補償に関する両者の法的和解が成立した。第三の、事件の事実を伝える展示館の建設が残った。

悔恨と謝罪を込め、事件当時五才だった谷地田恒夫さんから花岡在住の有志は二〇〇二年、

展示館建設を目指すNPO「花岡平和記念会」を立ち上げ、時に隠然とした抵抗に遭遇し、常に資金調達の困難さにぶつかりながらも、今日まで八年間、たゆまぬ努力を続けてきた。そんな中、『世界がもし一〇〇〇人の村だったら』の翻訳で知られる池田香代子さんの物心両面の応援は、彼らにとって、大きな励みになった。

とうとう努力が実る日が来た。先月（四月）一七日、花岡平和記念館が開館したのである。秋田杉で作られた二〇〇平米（六二坪）の平屋の記念館は、建物としては大きくはない。しかしそこには、「花岡被害者連絡会」が望んでいた事件の実を伝える中国人被害者や当時花岡に住んでいた人の証言、当時の写真、和解までの裁判記録、そして、若き日に北海道で中国人労働者の監督をしたことのある札幌在住の画家・志村墨然さんが描いた統一八五センチ横三三九センチの『花岡拷問図』など大きな意義を持った展示物が展示されている。

開館式に参加した生存者の李鉄垂さん（八七）は「中日友好のためにも本当にうれしい。記念館ができることは私の希望だった。中国に帰ったあとも、記念館のことを話していきたい」と語ったという。被害者とその未裔が受忍できる和解へのスタートである。花岡記念館の前には駐車場がある。われわれも一度、行ってみようではないか。

△つばい ちから・札幌学院大学名誉教授（平和学）▽